

## 【小峰家プロフィール】

### 小峰政文〔唐津市都市整備部建築住宅課副課長〕

1963年1月1日生まれ。体重0.1トン。生まれも育ちも現在の暮らしも佐賀県唐津市鎮西町丸田という根っからの地元人。地元の高卒卒業後、市町村合併前の旧鎮西町役場に就職し、地方公務員歴35年以上。唐津市職員というよりも、鎮西町役場の人のほうがぴったり。町役場時代から今まで産業・事業系の仕事が多かった。観光、漁港整備、漁業振興、上場開発（農地開発）、スポーツ振興、地域づくり、離島振興など。後述のからつ7つの島活性化協議会の発足の影の立役者。

丸田は小さい地域なので、地域でも、体育部長、生産組合長、消防団のラッパ隊長、お寺の檀家総代などを経て、現在は子どもクラブ会長。鎮西には太閤秀吉が築いた名護屋城跡などがあり、元寇襲来、遣唐使や遣隋使、日本で最初の稲作伝来など、古くから大陸との交流が盛んな場所。鎮西町史によれば、小峰の祖先は鯨漁の羽刺し（鯨に飛び移りまたがって最後のとどめをさす人）か。

小峰氏は体系からはあまり想像できないが、実は（昔）スポーツマン。社会人バレーボール（9人制）で全国大会経験有だとか。専業農家の一人息子。幼いころからの親の手伝いの3K農業（小農）の体験から「絶対に農業はしたくない」と公務員になったが、社会人大学の九州ツーリズム大学修了（第17期・平成26年度）〔観光まちづくり学科・ツーリズム学科〕などを経て、「この土地と地域と家族は宝物。活かして豊かな人生を」という考え方へ洗脳されつつある今日この頃。

### 小峰恵里花〔佐賀県立唐津東中学校2年〕

2006年4月生まれ。小学生時代はかけっこクラブに所属し、長距離をがんばったが、中学では書道部。書道は初心者でまだ上手ではないが、部員全員で行うパフォーマンスなどが自慢。母よりずいぶんおしゃれさん。

### 小峰浩輔〔唐津市立打上小学校6年〕

2008年6月生まれ。小学校まで4.4kmの道のりで足腰が鍛えられている。地域の下校リーダーとして4、5年生を引率する。昨年まで忘れ物大魔王だったが、一念発起しがんばっている最中。打上かけっこクラブに所属。長距離が得意。中学でも陸上部に入ってがんばりたい。

### 小峰 朋子（旧姓：土谷）〔現、唐津市離島地域コーディネーター〕

1969年11月生まれ。福岡県出身。大阪大学大学院工学研究科（環境工学専攻）卒業後、大阪府入庁。

大阪府庁時代に近畿水の塾の活動にはまる（NPO法人取得前）。ドレスデン工科大学（ドイツ）に留学し、環境に配慮したまちづくりを学ぶ。地方分権の進んだドイツでの暮らし中で「地域が素敵！最先端！」と実感したことが、現在、からつの七つの島の島おこし活動を支援するきっかけとなっている。

大阪府庁を自主退職後、行政書士を経て平成24年5月より、地域おこし協力隊として、唐津の七つの島と関わりはじめる。現在、唐津市離島地域コーディネーターとして七つの島の方々と、島が元気になるようにとあの手この手と手探りで奮闘中。

具体的な取り組みは、「からつ七つの島物産展」、「島と大学との連携事業」、「島での一日限定レストラン リストランテマツシマ」、島と島出身者を繋ぐ「からつ七つの島通信の発刊」、島を第二のふるさとに！「島留学」など。からつ7つの島活性化協議会事務局長。

# あした計画

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、フアクラスまで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

## 生きる 働く

11月中旬の日曜日。佐賀県唐津市の島崎ふらうぐらに、船場の七つの島から100人以上の島民が集まり、ソフトボール大会が開かれた。

「第3回七つの島島民スポーツ大会の開催は、神楽島チームです」。大会を企画した同市の離島地域コーディネーター、小峰朋子さん(46)の声に拍手が起きた。

小峰さんは2015年5月、「地域おこし協力隊」として同市に着任した。漁業の衰退や高齢化などの課題に直面する七つの島の活性化「島おこし」が、同市から求められた役割だった。方策が用意されていたわけではない。島誰かに、何があっても、どんな状況なのか。それを知るため、毎日一つずつ島を訪れることから始めた。

その一つ、向島。島に住む人の若者と島おこしについて語り合ったときのことだ。「人が申し訳なきようにほじた島おこしと言われても、そんなことを考えたこともないので何を発

### 第10部 地域おこしという仕事④

言したらいいかな」と、ほかにいいところもあるんだらいいかなともしもうちにもなるん。『そ、う、だ、ね。』と答えるしかなかった。

大学を修して大阪府で働いていたとき、ドイツに留学した。環境に配慮した町づくりについての研究のため、さまざま地域を訪れた。

そこで、住居同士が「種」になって町の在り方を決めている姿を目にした。風が巻くを取り入れたり、再生可能なエネルギーを利用したり。「問題が起きるのも、解決策は真っ先に組み込むも地域なんです」。小規模で意見をやりやすく、新しいことにすぐ取り組める。「地域は最先端だ」と思うようになった。



ソフトボール大会で笑顔を見せる小峰朋子さん(左端)

住民たちは皆、自分の町のことを自慢に話していた。地域に誇りを持っている姿はかっこよく見えた。

幅広さ、季節や動物、食材などが多様に富んだ日本の田舎の方が魅力的に映った。福岡市の美家に移り住み、行政サービスの仕事をしていたころ、東京市が協力を募集している聞いた。「やりがいがあるところ」と感服した。

各島は本土との間に航路を持つものの、島同士は孤立し、交流がなかった。共通する課題を抱える島の人たちを、隣の島の人と交わりたい。18年5月、七つの島の特産品を集めて同市の山間部で物産展を開いた。質の良い特産品は売飛した。別の島で作られた商品を見て、新たな商開発する島が出てくるなく、島民が導導するきっかけ

となった。

「活性化」を測る物差しは何なのか。ソフトボール大会はお昼は休みがない。でも「米と食料だ」「楽しかった」という声は聞ける。活性化は詰まるころ、「その地域に住む人たちの心の委化だ」と感。『地域』とは、何か確たるものではなく、そこに生きる一人の集まりなのだ。

島で映画の上映会を開いたとき、おばあちゃんが終り後に声を掛けてくれた。「10年ぶりに映画の興行を見た。あひがごとく腰を曲げて言われた。苦勞が吹き飛んだ。自分が大切に思う人が喜ぶ顔を見るのが、自分の喜びなのだ感だ。

今年3月に任期が終了する前、七つの島の代表者が連名で「小峰さんを雇ってほしい」と市長宛てに嘆願書を出した。同市は離島地域コーディネーターという新たな役職を作り、小峰さんは期間限定で非常勤職員として残ることになった。今年4月からは、家族4人をろって唐津で一時的に暮らしている。大好きな島の人たちのために、「必要としてもらえる間は頑張ります」と笑顔を見た。

(後藤) おわり